



2013年
会報 秋号
No.40

目の不自由な方々と共に映画鑑賞を楽しむことのできる環境づくりをしています。



ごあいさつ

シティ・ライツ代表 平塚千穂子

お天気がよく、キンモクセイの香をのせた風が、とても心地のよいこの季節。会員の皆さん、いかがお過ごしですか？芸術の秋、文化の秋ですから、このシーズンは、全国各地で映画祭が行われていますね。中にはバリアフリー上映を実施している映画祭も、結構たくさんあるをご存知でしょうか？

例えば、愛知県のあいち国際女性映画祭。新潟県の長岡映画祭。福岡県のアジア・フォーカス福岡国際映画祭。北海道の北海道ユニバーサル上映映画祭等です。関東でも、神奈川県で老舗の市民映画祭「かわさき しんゆり映画祭」が行われています。

この映画祭では、早くも1997年からバリアフリーシアターが実施されていて、シティ・ライツを立ち上げて間もない頃に、どんな風に音声ガイドを作っていたらいいのか？勉強させていただいた映画祭です。活動のはじまりは、中途失明された地元の女性からの「目がみえない人も映画を楽しめるようにしてほしい。」という、1本の電話からだったそうです。この女性の要望を聞いた実行委員が、1997年の第3回しんゆり映画祭から毎年2本ずつ、映画祭のプログラム作品に副音声ガイドや日本語吹き替え、日本語字幕を付けて上映を続け、2007年にはバリアフリー上映の専用機材を搭載した初の映画館までできてしまったのですから、スゴイ！

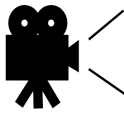
どの映画祭もそれぞれ地域のボランティアグループが、音声ガイドを手作りして、地域の視覚障がい者の方々と共に楽しめるバリアフリー上映を実施しています。皆さんがお住まいの地域で、上映会や映画祭が行われているのに、まだバリアフリー化されていないければ、この1本の電話をかけた女性のように、勇気を出して、主催者に声をあげてみてはいかがでしょうか？

バリアフリー上映は、とても大変なことをしなければならぬ！というイメージを持たれがちなのが世の常ですが、「ここでも、あそこでも、やっていますよ。」というのがわかると、意外とすんなり話が運んでしまうのが、日本という国の特徴のようです(笑)。

シティ・ライツでも今年のはじめて、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) が主催する、難民映画祭にご協力しましたが、そのおかげで、UNHCRの方々はもちろんのこと、日本映像翻訳アカデミーのディスクリバラー養成講座の皆さんや、明治大学の学生支援室の職員や先生方、若い学生ボランティアの方々と交流することができ、これまで私たちが培ってきた音声ガイドのノウハウや、どのような意識で、どのように来場者をサポートしたらよいか？を伝える、よいきっかけをいただきました。そして、わたしたちも、普段、あまり観ることのなかった、難民問題を取り上げたドキュメンタリーに触れ、世界の情勢を知り、平和を願う上映空間＝「場」に、参加する機会を与えていただきました。今回、参加させていただいて、こういう機会はどんどん広げていきたいな、と思いました。

この夏、ハケ岳で行われていた「星空の映画祭」というのも、どんな映画祭なのか気になって、コソソリ視察に行ってきたのですが、こちら、ボランティアの方々が、企画からすべて自主的に運営していて、手作り感あふれる、とてもステキな映画祭でした。星空の下、森の中に設置された大きなスクリーンに映し出された映像や音楽は、とても幻想的で素晴らしいものですが、地べたに草の感触を感じ、土の香りや、鈴虫の声に包まれて鑑賞する空間では、心がより解放される感じがして、空間が創り出す感動波というのは、共に観ている人々からも、大地からも、森からも、空からも、創り出されるものなのだな～。映画は「場の体験」なんだな～と、改めて実感しました。来年は、「星空の映画祭」もバリアフリーにして、ハケ岳に一泊するツアーでも組みたいな～。などと、夢みてしまいましたが、アンテナをはっていると、そんなステキな「場」というのは、あちこちに創り出せるものなのではないかと思えます。

一瞬、一瞬、「場」を常に創っているんだという意識、もっと大切にしていきたいですね。シティ・ライツも、「ないものは自分で創る」の精神からスタートしたのに、いつの間にかそういう精神が、失われつつあったように思います。無意識でいると、つい流されてしまいます。いつまでも、モノづくりの精神を忘れず、進化していきたいと思う、秋の夜長なのでした。。。



活動報告

～同行鑑賞作品～

このコーナーでは、近日(7～9月まで)に開催された音声ガイド付き上映会や、同行鑑賞会をレポートします。参加された皆さん、企画者そしてボランティアの方々お疲れ様でした。

- 7/15【シアター同行鑑賞会】『俺はまだ本気出してないだけ』 川崎チネチッタ
- 7/21【シアター同行鑑賞会】『太陽がいっぱい』 川崎チネチッタ
- 8/3【シアター同行鑑賞会】『モンスターズ・ユニバーシティ(2D吹替)』 ユナイテッドシネマ としまえん
- 8/4【シアター同行鑑賞会】『真夏の方程式』 ユナイテッドシネマ としまえん
- 8/5【シアター同行鑑賞会】 日韓交流企画『爆心長崎の空』 シネマジャック&ベティ
- 8/17【シアター同行鑑賞会】『終戦のエンペラー』 丸の内ピカデリー
- 8/18【シアター同行鑑賞会】 夏休み企画 インド映画『きっと、うまくいく』 TKPシアター柏
- 8/25【シアター同行鑑賞会】『卒業』 川崎チネチッタ
- 8/27【シアター同行鑑賞会】『終戦のエンペラー』 ユナイテッドシネマ浦和
- 8/31【シアター同行鑑賞会】『少年H』 川崎チネチッタ
- 9/15【シアター同行鑑賞会】『風立ちぬ』 ユナイテッドシネマ浦和
- 9/16 第6回 したまちコメディ映画祭インド映画『マッキー』 不忍池水上音楽堂
- 9/22【シアター同行鑑賞会】『きっと、うまくいく』 川越スカラ座
- 9/23【シアター同行鑑賞会】『スター・トレックイントゥ・ダークネス(2D字幕版)』 ユナイテッドシネマ浦和
- 9/23【上映会】『楽園からの旅人』 岩波ホール
- 9/28【シアター同行鑑賞会】『あの頃、君を追いかけた』 新宿武蔵野館
- 9/29【シアター同行鑑賞会】『キャプテンハーロック(2D版)』 川崎チネチッタ

同行鑑賞レポート

少し前になりますが、今回は、「真夏の方程式」ガイド担当したしのたんに原稿を頂きました。では、どうぞ

新しい「映画の見方」に出会った夏 『真夏の方程式』音声ガイドより

しのたん(高橋忍)

「横断歩道になっていたよ」と、鑑賞会後の食事会で、めーたんに指摘されて、「えー！」そんなところで間違っていたのかと唖然。私が音声ガイドをして3作目の『真夏の方程式』の冒頭は、横断歩道橋であって横断歩道ではないのです。この二つはまったくイメージの違うもの。リハーサルでは間違わずに言えていたのに、本番では気づかないうちに間違っていたのです。

見たものを頭に取り入れてから、言葉にしてアウトプットするというのは、意外に簡単なことではありません。リハーサルは苦戦をしています。私の強みは、間違っても、それを引きずらないところ。となると、どんな感じかと言うと、頭の中で(はい！次のシーン)と号令を出し、次々と踏破していきます。結果、リハーサルが終わってみると、へんでこな言い回しの山を築くわけです。例えば、正しい言葉がパツと思いつかず、(あれあれ？うーん？もう言っちゃえ！)「車が付いたスーツケース」と言い放ち、ダメ出して「キャリーバックでしょ」と言われ、赤面。太いサインペンで大きな字でメモに落とす。だから、リハーサルで間違った言葉の方が、本番では正しく言えたりします。

単純な言葉以外に、専門用語に類するものも気になります。今までは見逃していることも、形ある言葉にするとなんだろう？という疑問が湧きます。「真夏の方程式」では、警察関連の場所などが多く出てきます。留置所なのか拘置所なのか？この人は警察官な

のか刑務官なのか？それで、映画「ひみつのアッコちゃん」の法律監修をされた中島章智弁護士に相談。丁寧な方で、数々の資料を教えていただき、映画にはまったく出てこないような「警察の留置業務」まで精通してしまいました。拘置所に入る予定がある方には解説します。連絡ください。

そんな話を、職場でしていたら、「映画の新しい見方ですね」と言われ、ハッとしました。他人に「伝えたい」と思った時、分からないものを通り過ぎるわけにはいけないので、何度も噛み、周辺まで調べます。映画を客観的な他人の作品と捉えるのではなく、自分の血肉として取り込むような感覚です。こんな刺激的なコミュニケーションは、そうないと思います。本番の張りつめた緊張感がたまりません。この雰囲気の中、しっかりとスクリーンを見据えてぴしゃりと表現できた瞬間、映画との一体感があります。

夏の盛り、私は、もう一度、映画に出会いました。



したまこメ 映画祭レポート

したまこメ映画祭は、2008年、東京都台東区で誕生した日本初の本格コメディ映画祭。日本の喜劇発祥の地であり、いまなお古き良き庶民文化が引き継がれている下町「浅草」と、日本有数の芸術・文化施設の集積地「上野」を舞台に、浅草在住のクリエイター、いとうせいこう総合プロデューサーを中心に、「コメディ」を単に面白いだけのものに留まらない、世代を超えた多くの方々に親しんでいただけるよう、国内外の新作・旧作・名作・珍作・異色作から選びに選抜いた最上級のコメディをプログラミングしています。

シティ・ライツは、2009年の第2回映画祭から、音声ガイド付き上映に協力しています。第2回、第3回は、プログラムの一企画として、落語を題材にした「しゃべれどもしゃべれども」と「落語娘」に音声ガイドをつけました。第4回は、ワールドプレミアのオープニング上映でバリアフリー上映を実施していただき、NHKの人気バラエティ番組「サラリーマンNEO」の劇場版。第5回は、「Tokyo てやんでい」に音声ガイドをつけて、ゲストのトークショーにも音声ガイドをつけるなどして、みんなで一緒に盛り上がりました。

そして、今年、第6回したまこメ映画祭は…、上野公園の野外ステージで上映されるインド映画「マッキー」に、音声ガイドをつけることになりました！シティ・ライツも12年活動を続けてきましたが、野外で上映するのは初めて！インド映画も初めて！で、ウキウキ、ワクワクしていましたが、いや～フタを開けてみると、まあ、大変！愛する人を守るため、ハエに生まれ変わった男の復讐劇が、ほとんどセリフなしで展開されるCG映像も歌も踊りも満載の映画で。。とにかく、音声ガイドも字幕朗読も、かなりのチャレンジと冒険をしました！今回はそのガイドづくりの苦労談を、ガイド制作チームの皆さんにコメントいただきました。

『マッキー』ガイド制作チームより。

本編開始から13分の1番手を担当した、リーダーこと平塚です。

わたしのパートは、まずタイトルバックで1時間悩みました。赤くて濡れっぽい六角形の細胞のようなものがビッシリ。という気持ち悪い映像からはじまり、カメラが引くと、うわっ、これが、ハエの複眼だったんだね！とわかる。そして、一匹のハエの上に、タイトル。「マッキー」の文字が重なります。ちなみに、「マッキー」とは、ヒンドゥ語で「ハエ」の意味です。製作期間が短かったので、今回はスカイプで検討会をやりました。“「複眼」を音で聴くと、「目」だと瞬時にわかりにくいね。”“冒頭だからあんまり言葉をぎゅーぎゅーに詰め込むと疲れるよね”などなど。話し合っ、スッキリしたガイドになったかな？一番手のパートは、登場人物がはじめて出てくるシーンでもあり、悪役スディーブの濃い色男キャラに、困ったストーカー男としか思えない、ハエになる前の人間ジャニ。つんデレ聖女のヒロイン、ビンドゥ。映画がちゃんとキャラの味を出してくれていたの、ガイドで補う必要はほとんどなかったけれど、ところ、ど

ころ、コメディだから、いいか！と、いつもよりも解放的にガイドをつくれたのが、楽しかったです。

おやまだです。よろしく願いします。

ガイドは2番手を担当しました。ジャニがまだ人間だったのでアクションシーンがなく、ホッとしつつもちょっと残念でした。

代わりにこだわったのは、まなちゃんが担当したシーン。裸じゃなく、すっぱだかはどうとかか(最終的にはすっぱんぼんになりました)、片足を上げてじゃなく、股間丸見えはどうとかか、そんな提案ばかりしてました。コメディのガイド作りは楽しい！！

ながた かおるです。

毎回、したコメには参加しておりますが、今回は、異国へ旅立った武藤さんへ想いを馳せながら、3番手のガイド制作と、監修を担当しました。…とは言うものの…。ハエはしゃべりません！ダンスは？歌の間は？チャレンジする事、盛りだくさんでかなり型破りな作り方になりました。また、字幕朗読を担当してくださった方々のアドリブに助けられ、リーダーの編集にも助けられました。この映画のガイドは優に800箇所を越えますが、映画のテンポを損なわないように一丸となって頑張りました。

劇場公開された時には、みんなでハエダンス！盛り上がりましょう！

まなです。

したコメのガイド作成は3回目の参加です。毎回毎回、爆笑できる作品を一足先に見れる喜び！

前回の「東京でやんでい」は台詞が多くて、「どこにガイドを入れる隙があるの？」という苦労だったのですが、今回は、「せ、台詞をしゃべってくれてないっ！」という苦労でした。

主役のジャニはハエだからしゃべらない。でもハエのくせして本当に芝居がうまいんです。見てるとハエに感情移入していってしまう。ハエなのに…。

長田さんの監修稿はすごく状況が分かりやすくなっていて、吹き替えもナレーションも芸達者な仕上がりで、本当に多くの人に鑑賞してもらいたい作品になってます！機会があればどうぞ鑑賞してください。

あ、今回の検討会でスカイプ会議を初体験したことも、忘れられない思い出です。

田中です。

したコメは初参加で、遠く離れた鳥取県からスカイプにも参加できました。

ネットの進歩は本当に素晴らしい！鑑賞会の会場までつながればいいのになあ…。

私の担当部分は前半のクライマックスで、ハエが人間を追うカーチェイス？と派手なクラッシュシーン、ホラーっぽい怖さ…と見どころが満載のパートでした。

あ、見どころのないパートなんて全然ない映画でしたね(笑)。

超ど級の面白さ、ぜひ体感してください。

米谷です。

家庭の事情で、1年近く映画から遠ざかっていたため、ガイドの書きかたを思い出すところから始めました。スカイプでの検討会にも参加できず、皆さんにご迷惑をおかけしましたが、監修の長田さんをはじめ、皆さん一丸となってガイドを作り上げる熱気を久しぶりに感じる事ができて、楽しかった！これを機にまたガイド作りに復帰したいなー。

によこです。

書いても書いても終わりが見えない！

完成が全然見えてなくて、書いていてここまで泣きそうになった映画は初めてでした。

私が担当したパートは「マッキー」のテーマソングが初登場するシーン。

聞かせたい歌詞を活かしつつ、ガイドで映像のおもしろさを伝えるのが、すごく難しかったです。

本来は字幕がないところに台詞を入れ、ストーリーをわかりやすく監修してくださった長田さんに感謝です。

「マッキー」は字幕朗読とガイド制作チームが協カタッグを組んで実現した、まさにシティ・ライツならではのガイドになったと思いま

す。

まおっちです。

したコメは初参加、ガイドは映画祭に続いて2回目でした。ジャニと二羽の鳥のバトルシーンの担当をしました。動きがめまぐるしいのと鳥が頑丈すぎるので、最初は何をしているかがわからず、ここが担当だと大変だなと思ったら担当になってしまいました。スカイプ検討会には参加できなかったのですが、皆様の暖かいフォローを頂きまして無事に形にすることができました。小さいジャニが知恵を絞って大奮闘します。どうぞお楽しみに！

みみすけこと、岡田です。

したコメはお声をかけていただき始めての参加でした。パートは「遠い空の向こうに」に続き最後のパート。雰囲気盛り上げ、かつ感じた感動を忠実にガイドするように頑張りました。コメディタッチの作品は初めてで、かなり勝手が違い戸惑う事も多かったけれど、楽しかったです。スカイプ使ったの確認も初めてでいい経験になりました。でもやっぱり集まってわいわいするほうが楽しいかな。いろんなことを思ったです。

映画祭当日は、台風の影響で電車がとまったり、雨脚も心配で、シティ・ライツの鑑賞会としては“中止”となりましたが、映画館での公開は、10月26日から。まだ決まっていませんが、どこかの劇場で、バリアフリー上映をリベンジしたいと思っていますので、どうぞ、お楽しみに！！



特集

映画をめぐる～世界の映画祭を知ろう

結構回数を重ねているこのコーナー。今回は、2010年からはじまった奈良国際映画祭を取り上げます。映画祭の成り立ちと目的について、ホームページから情報が取れたので記載します。

なら国際映画祭

①経緯

この映画祭は、2007年に『殞の森』で第60回カンヌ国際映画祭グランプリに輝いた河瀬直美監督が提唱したもので、奈良在住の河瀬監督が、映画を通してふるさと奈良を世界に広く発信し、活気づけようと呼びかけ、2010年に第1回が開催された。

その中心的な活動の1つが「NARActive(ナラティブ)」と呼ばれるプロジェクトで、今後活躍が期待される若手監督を招き、奈良を舞台に映画を製作。日本の第一線で活躍する映画スタッフやロケ地に住む地域の人たちがサポートに加わり、一緒になって映画を完成させていくというもの。2012年は、ブリュッセル出身のメキシコ人監督ペドロ・ゴンザレス・ルビオ氏が選ばれ、『祈-Inori』という作品が撮影された。本作は、奈良県南部十津川村・神納川地区を舞台に、かつて賑わいを見せた十津川村に今も宿る自然と、人間の考える“発展”とのはざままで生きる村人の営みを描いた意欲作で、ロカルノ国際映画祭新鋭部門最高賞グランプリを受賞。本映画祭で披露された。

②目的

「“国際文化”観光都市」奈良を、「“国際交流”観光都市」に

奥深い伝統文化と荘厳な祈りの場、そして美しい自然が調和する、世界にも稀な固有の風景を保つ奈良の魅力の世界の人々に知ってもらい、このまちに暮らす人たちがそれに誇りをもつきっかけとなる「なら国際映画祭」を創ります。

そして、かつて国際文化・経済交流の拠点として栄えた奈良の都が、世界に開かれた真の「“国際交流”観光都市」となることを目指し取り組んでいきます。

<地域振興と若い人材の育成>

第60回カンヌ国際映画祭でグランプリを受賞した奈良在住の河瀬直美監督と、奈良を愛する人々と共に、古の都 奈良の風土・文化を活かした「なら国際映画祭」を創ります。

また、この場所で国際交流を行なうことで、国際コミュニケーション力・故郷を想う心を兼ね備えた地域の若い人材を育成し、世界の映画人をはじめ国内外の人々がここ奈良に集いたくなるような、おもてなしの心が行き届いた映画祭を目指します。

<地域産業活性化への波及効果>

国際映画祭を通してのネットワークの構築や、イベント、グッズ作成などを通じて、奈良固有の風土に生まれ長い歴史と伝統に培われてきた有形・無形の文化遺産や、地場産業（和紙、墨、晒など）の魅力を国内外に積極的にアピールし、地域の人々の生活や生業の活性化を目指します。



前々回からはじまったこのコーナー。今回は須原さんに素敵な原稿をいただきました。では、どうぞ。

小さな出合いを重ねながら

須原ひとみ

「初めて映画館で観た映画はなんですか？」

「たしか、子供向けのアニメだったような...。」

先天網の私にとって、テレビで映画やドラマを観ることはあっても、映画館はずっと遠い場所のように思っていました。ですから、初めて同行鑑賞会の話を書いたときも、よくわからないまま参加したような気がします。

その日の映画は「アイ アム サム」。ストーリーの素晴らしさに加えて、ガイドと字幕朗読の音声を聴きながら、今上映されている作品を映画館で一緒に鑑賞できた驚きと喜びは、今もよく覚えています。

早速、シティ・ライツに入会し、鑑賞会に参加するうちに映画のおもしろさにひかれて、一人でも映画館へ出かけるようになって

いきました。

7月の日曜日。いつもより少し早起きして、上映館の最寄駅へ。駅員さんに道を尋ねていると「ちょうど前を通るので、そこまで一緒しましょうか」と女性の方が声をかけてくださいました。窓口でチケットを買いながら、館内の誘導をお願いして座席へ。今日も無事に到着しました。

別の日。映画館の入り口を聴こうと、偶然すれ違った女性に声をかけてみました。

「映画館って？あなた、映画観るの！あなたが？映画を！！一人で……」

ひとしきり驚いた後、私の返事も聞かずに、あわてたように入り口まで誘導してくれました。

別の日。「いい映画でしたね。」映画館を出てエレベーターの順番待ちをしていると、隣の方に話しかけられました。小学生の男の子二人と、そのお父さん。「信号を渡るところまでお送りします。」というお言葉に甘えて、今観た映画の話をしながら駅へ。来てよかったと思った瞬間でした。

一人で観るときは邦画に限られますし、セリフや映画の音声だけではわからないこと、気づかないこともたくさんあります。それでも、多くの出会いの中、私の一人鑑賞はこれからも続きそうです。



思い出の映画

一思い出は、名画とともにいつまでも一。

このコーナーでは“思い出の映画”にまつわる投稿エッセイをご紹介していきたいと思えます。皆さんの汗と涙の人生をセピア色に彩る素敵な名画の数々をエピソードとともにお寄せ下さい！！

映画の思い出

みいな&盲導犬・プルちゃん

「思い出の映画」をテーマに原稿依頼を受けましたがあ…はい、若い頃はデートの定番？として、たくさんの映画を見ました。でも、20歳くらいでグーンと視力低下した私にはスクリーンの映像がほとんど見えず…ってことで、鑑賞後には「楽しかったね♪」なあって、かわいく言いながら？ほぼ理解できておらず、あまり覚えていません♪
子供が生まれてからはアニメ映画を見に連れては行きましたが、これまた、もっと理解できず鑑賞料を払っての「お昼寝タイム」でした♪

映画鑑賞を心から楽しみ満喫できるようになったのはCLCの同行鑑賞会に参加するようになってからです。映画中で説明できない部分は事前・事後メールでフォローもバッチリだし、私がずっと前から知りたかった出演者の髪型・服装・体系、情景など…想像力がモクモクかきたてられます♪それに誘導ボラさんが付いてくれて新たな出会い！鑑賞後のお茶会では、映画の話は勿論、参加者とグーンと近づく交流タイムにもなってます♪

こうして今まさに、少しずつ私の思い出の映画アルバム蓄積中です♪ CLC万歳！



お知らせ

■新規会員のご紹介

(2013年9月30日までにご入会いただいた方々です。)

[正会員] ・高橋 忍(埼玉県所沢市在住) ・兵藤 崇彦(東京都杉並区在住)
・分部孝子(北海道函館市在住)



編集後記

編集スタッフ、校正係や音訳スタッフも大募集！

希望の方は会報編集課まで！

（会報編集課 ノンちゃん）

今年の夏は？今年の夏も？異常気象が続きました。高知県では日本最高気温の記録を更新しやけどに気を付けながら歩くほどになり、北関東は竜巻に襲われ…。そして、つい先日は台風18号が各地に爪痕を残して行きました。こんなにも信じられないようなことが起こると、ついにSFも現実のものになるのではないかと考えてきます。予習のために、今まであまり観たことのなかったSF映画も観てみようかと思う今日この頃です。

観たことがなかったと言えば、インド映画もこれまで未見だった私。とにかく長くて、やたらと踊るというくらいのイメージしかなかったのですが、「きつと、うまいく」を観てその世界にはまった自分に驚きました。もっとも、この作品はインド映画史上最高の作品と言われているもので、他のものとはちょっとばかり違い、コメディの中にもインド国内の社会問題を織り込んでいるなど見どころたっぷり。170分という長さは全く感じさせないものでした。上映後のトークショーで聞いたところによりますと、インドの劇場の客席はとつてもにぎやか。歌に合わせて手拍子が起こったり、口ずさむ人がいたりなどするそうで、なんだかその気持ちが分かるような気もしました。

（会報編集課 吉川）

皆さんこんにちは。今年の夏、暑かったですね。

最近、コンサートによく行っています。自分の友人の中に、合唱団に入っている人や、セミプロのミュージシャンがいて定期的にライブをやっているの生で音楽を聴く機会が多くなりました。

先日行ったのは、ブラームスのシンフォニー3番、リヒャルトシュトラウスのツァラトゥストラはかく語りき。という結構すごいプログラム。

ブラームスの3番は大好きな曲で3楽章の物悲しい空気がたまらないのですが、やっぱり生は格別ですね。

ツァラトゥストラはかく語りきはよさがいまいちわからなかったのですが、生演奏の情報量はすごいです。

こんなにすげえ曲だったのかと大感動！！数年ぶりに自分の中でクラシックブームが起きました。

その分、映画があまり見れていないので秋から映画を見ていこうと思います。

お忙しい中、今回の会報作成に協力いただいた方々には、大変感謝しております。ありがとうございました。

皆さまの投稿を、心よりお待ちしております。宛先は、kaihou@citylights01.org。次回の発行は1月10日。投稿される方は、12月第2土曜日までをお願いします。『会報のデータ送信』を希望の方には、会報のテキストメール送信にも対応します。ご希望の方がいらっしゃれば、会報編集担当アドレス<kaihou@citylights01.org>まで、氏名と会報の送信を希望するメールアドレスを記入して、お申し込みください。

2013年秋10月10日発行 編集：吉川俊平、斉藤恵子、石坂春香

発行者：バリアフリー映画鑑賞推進団体 シティ・ライツ

事務局：〒114-0016 東京都北区上中里 1-35-15 TEL&FAX 03-3917-1995

E-mail mail@citylights01.org URL http://www.citylights01.org

